

女子大学生の友人関係不安と社会的スキル及び自尊感情との関連

I. 問題・目的

筆者らは友人関係において日々不安を感じている。これは筆者らに限ったことではない。榎本(1999)は「外面的にはうまくいっているように見える友人関係でも一緒にいることに重点が置かれ、内面的には満足感や安心感などが得られていない」と推察しており、青年が友人関係を築いていても不安を感じていることを示している。また現代青年の「本音を出さない自己防衛的なつきあい方」や「みんなと同じようにしようとするつきあい方」、「皆から好かれることを願っているつきあい方」などのつきあい方をすることで友人に自分がどのように思われているかが気になり友人関係における不安が促進されていると指摘されており(伊藤・増田,2010;落合・佐藤,1996)現代青年は、より友人関係において不安を感じることが多いと考えられる。伊藤ら(2010)は女子青年の友人関係における不安を測定する尺度である友人関係不安尺度を作成している。榎本(1999)によると人間関係において女子は男子に比べて不安が高く、本調査でも友人関係における不安を調査するにあたり女子大学生を取り上げたいと考えた。よって、まず女子大学生の不安を調査するために伊藤ら(2010)の作成した友人関係不安尺度を用いることにした。

伊藤ら(2010)は本音を出さない自己防衛的なつきあい方をすると「ほんとうの自分が出せない状況が続き、本当の自分が知られたときに否定的に思われていないか気になったり、友人から本当に友人と思われているかどうか確信が持てなかつたりして、友人関係を維持することに不安を感じるようになる」と示しているが、反対に「自分に自信をもって自立したつきあい方をする人は、友人関係の維持に関する不安が低くなる」と述べている。

筆者らは自分に自信を持つことを自尊感情があることの一部であると捉え、自尊感情の高い者は自尊感情の低い者に比べ友人関係不安が低いのではないかと考え、調査することにした。Rosenberg は、自尊感情は2つの異なった側面があることを指摘している。ひとつは個人が自分は「とてもよい(very good)」と感じる側面であり、もうひとつは、自分は「これでよい(good enough)」と感じる側面であるという(内田ら訳,2010)。「これでよい」とは、自分を他者と比べて自信を感じるとか、優越感を持つといったものではなく、自分自身に対して尊敬でき、価値ある人間と捉えることのできる程度であり、Rosenberg 自尊感情尺度では、後者の「これでよい」と感じる程度を測定している(内田ら,2010)。伊藤ら(2010)の「自分に自信を持って自立した付き合い方をする」というのは、Rosenberg 自尊感情尺度で測ることの出来る「これでよい」という考え方に近いのではないかと考え本調査では自尊感情を測定するために Rosenberg の自尊感情尺度を用いることにした。

また友人関係不安において自尊感情だけでなく、個人の社会的スキルが関係しているのではないかと考えた。

社会的スキルとは対人関係を円滑に運ぶための技能であり、相手がこちらを無視しないでこちらのはたらきかけに応じてくれる「肯定的反応」を貰うことができ、反対に相手が応じてくれなかったり、あからさまに拒否したりする「否定的反応」を避けることの出来るようなスキルを指す(菊池,1988)。

原田・島田(2002)によると、自分の社会的スキルを低く評価している人ほど対人関係不安が低いことが示されている。筆者らは、これは友人関係にもあてはまるのではないかと考え、社会的スキルの低い者ほど友人関係不安が高くなるのではないかと考え調査することにした。

II. 仮説

- (1)自尊感情の高い者は低い者に比べて友人関係不安が低い。
- (2)社会的スキルの低い者は高い者に比べて友人関係不安が高い。

III.方法

調査対象 S 大学女子大学生 97 名を対象に質問紙調査を行った。有効回答数は 95 名であった。

調査日時・場所 2016 年 6 月 3 日大学内の大教室にて 10:50-11:00 に実施した。

調査材料

(1)伊藤拓・増田和美(2010)の女子青年の友人関係不安尺度

女子青年の友人関係における不安を測定する尺度である(伊藤ら,2010)。「友人関係維持不安」、「自分の内面を友人に知られる不安」の 2 因子 25 項目からなるものを用いる。「非常にあてはまる」、「かなりあてはまる」、「ある程度当てはまる」、「少しあてはまる」、「全く当てはまらない」の 5 件法である。

表1. 友人関係不安尺度

-
- 1.友人を遊びに誘うとき、断られるかもしれないと不安である。
 - 2.友人に嫌われているのではないかと不安である。
 - 3.友人の内面にどこまで踏み込んでいいか分からず不安である。
 - 4.グループから外れ、一人になることが不安である。
 - 5.自分の内面に踏み込まれすぎると不安である。
 - 6.友人から、仲の良い友人だと思われているか不安である。
 - 7.友人が、一緒に遊びたいと思ってくれているか不安である。
 - 8.ありのままの自分を出すことが不安である。
 - 9.自分の態度が友人との関係をぎくしゃくさせるのではないかと不安である。
 - 10.友人に自分勝手と思われているのではないかと不安である。
 - 11.友人と親くなれるか不安である。
 - 12.どんな時でも、友人の機嫌を損ねることが不安である。
 - 13.友人に空気を読めない人だと思われているのではないかと不安である。
 - 14.友人と対立するのが不安である。
 - 15.ずっと友人でいられるか不安である。
 - 16.友人にうざいと思われていないか不安である。
 - 17.自分といても、友人がつまらないかもしれないと不安である。
 - 18.友人の言うことが行動と一致していないと不安である。
 - 19.友人に嫌われてしまうのではないかと不安である。
 - 20.友人との話題についていけなくなるのが不安である。
 - 21.自分が友人を傷つけてしまったのではないかと不安である。
 - 22.友人が何を考えているのか分からず不安になる。
 - 23.友人に信用されているか不安である。
 - 24.友人にどう思われているか不安である。
 - 25.友人に冷たい態度をとられると不安である。
-

(2)菊池章夫(1988)の kiss-18

対人関係を円滑に運ぶための技能であり、相手がこちらを無視しないでこちらの働きかけに応じてくれる「肯定的反応」を貰うことが出来、反対に相手に応じてくれなかったり、あからさまに拒否したりする「否定的反応」を避けることの出来るようなスキルを指す(菊池,1988)社会的スキルを測定するための尺度。「いつもそうだ」、「たいていそうだ」、「どちらともいえない」、「たいていそうでない」、「いつもそうでない」の5件法で、「問題解決力」、「トラブルの処理」、「コミュニケーション能力」の3因子18項目からなる。

表2. 社会的スキル尺度 (kiss-18)

-
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。
 2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
 3. 他人を助けることを、上手にやれますか。
 4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
 5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
 6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。

 7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
 8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
 9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。
 10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
 11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
 12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。
 13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
 14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
 15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
 16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
 17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。
 18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。
-

(3) ローゼンバーグの自尊感情尺度(桜井(2000)により日本語訳されたもの)

他人に対する「自信」や「優越感」を意味するような自尊感情ではなく「自己受容」を意味するような自尊感情(桜井,2000)を対象にした10項目からなるものを用いる。「はい」、「どちらかといえばはい」、「どちらかといえばいいえ」、「いいえ」の4件法である。

表3. 自尊感情尺度

-
1. 私は自分に満足している。
 2. ★私は自分がだめな人間だと思う。
 3. 私は自分には見どころがあると思う。
 4. 私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる。
 5. ★私には得意に思うことがない。
 6. ★私は自分が役立たずだと感じる。
 7. 私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。
 8. ★もう少し自分を尊敬できたらと思う。
 9. ★自分を失敗者だと思いがちである。
 10. 私は自分に対して、前向きな態度をとっている。
-

注) ★は逆転項目であることを示している

IV. 結果

初めにデータ整理を行った。得られたデータに整理番号をつけ、質問項目に欠損のあるものはデータの処理の対象外とし、有効回答数は95名で、すべて女性であった。

1. 友人関係不安尺度、社会的スキル(kiss-18)、Rosenbergの自尊感情尺度の因子分析と信頼性の検討

(1) 友人関係不安尺度の分析

友人関係不安尺度25項目に対して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。さらに先行研究で用いた伊藤ら(2010)は2因子であったため、2因子解を指定した。因子分析の結果、25項目2因子が抽出された。第1因子は「友人と対立するのが不安である」「友人に自分勝手と思われるのではないかな不安である」など、友人からの評価に対する不安に関する項目が多いため、「友人からの評価不安因子」と命名した。第2因子は「ありのままの自分を出すことが不安である」「自分の内面に踏み込まれすぎると不安である」など、友人との距離の不安に関する項目が多いため、「友人との距離不安因子」と命名した。友人関係不安尺度の因子パターンを表4に示した。

表4 友人関係不安尺度の因子分析結果

因子	質問項目	因子	
		1	2
友人からの 評価不安	14.友人と対立するのが不安である。	0.96	-0.20
	10.友人に自分勝手と思われるのではないかな不安である。	0.93	-0.11
	19.友人に嫌われてしまうのではないかな不安である。	0.92	0.00
	24.友人にどう思われているかな不安である。	0.91	-0.03
	7.友人が、一緒に遊びたいと思ってくれているかな不安である。	0.88	0.00
	23.友人に信用されているかな不安である。	0.86	0.00
	15.ずっと友人でいられるかな不安である。	0.85	0.01
	6.友人から、仲の良い友人だと思われるかな不安である。	0.83	0.02
	16.友人にうざいと思われるのではないかな不安である。	0.82	0.05
	20.友人との話題についていけなくなるのが不安である。	0.82	-0.05
	13.友人に空気を読めない人だと思われるのではないかな不安である。	0.79	0.08
	25.友人に冷たい態度をとられると不安である。	0.70	0.03
	4.グループから外れ、一人になることが不安である。	0.60	0.04
	11.友人と親しくなれるかな不安である。	0.58	0.28
	21.自分が友人を傷つけてしまったのではないかな不安である。	0.55	0.19
友人との 距離不安	17.自分といても、友人がつまらないかもしれないと不安である。	0.50	0.33
	18.友人の言うことが行動と一致していないと不安である。	0.48	0.30
	12.どんな時でも、友人の機嫌を損ねることが不安である。	0.44	0.39
	8.ありのままの自分を出すことが不安である。	0.16	0.67
	5.自分の内面に踏み込まれすぎると不安である。	-0.31	0.64
	3.友人の内面にどこまで踏み込んでいいか分からず不安である。	0.13	0.64
	22.友人が何を考えているのか分からず不安になる。	0.26	0.54
1.友人を遊びに誘うとき、断られるかもしれないと不安である。	0.17	0.50	
9.自分の態度が友人との関係をぎくしゃくさせるのではないかな不安である	0.39	0.49	
2.友人に嫌われているのではないかな不安である。	0.40	0.44	
		I	II
		I	1.00
		II	0.80
			0.80
			1.00

次に、友人関係不安尺度の平均値、SD、 α 係数の結果を表5に示した。各因子の信頼性の検討として α 係数を算出したところ、高い値が得られた。

表5.友人関係不安尺度の平均値と標準偏差および α 係数

	平均	SD	α
友人からの評価不安因子	1.52	1.04	0.97
友人との距離不安因子	1.53	0.93	0.87

(2)社会的スキル尺度の分析

社会的スキル尺度18項目に対して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。因子分析の結果16項目3因子抽出された。また因子負荷量が0.35未満であった「仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか」「他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか」の2項目を除外した。第1因子は「仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか」「他人にやってもらいたいことを、上手く指示することができますか」など問題を解決する力を問われる項目が多かった。第2因子は「まわりの人たちが自分とは違った考えをもっているもうまくやっていますか」「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか」など、トラブルに対する処理能力に関する項目が多かった。第3因子は「初対面の人に自己紹介が上手にできますか」「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」などのコミュニケーションに関する項目が多かった。これらの3つの因子名は、菊池(1993)の「問題解決力因子」、「トラブルの処理因子」、「コミュニケーション能力因子」をそのまま使用した。社会的スキル尺度の因子パターンは表6に示した。

表6 社会的スキル尺度の因子分析

因子	質問項目	因子		
		1	2	3
問題解決力	9. 仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。	0.80	-0.07	-0.03
	2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。	0.68	-0.04	0.14
	12. 仕事の上で、どこに問題があるかすぐにみつけることができますか。	0.65	0.11	-0.05
	14. あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。	0.64	0.28	-0.23
	13. 自分の感情や気持を、素直に表現できますか。	0.62	-0.24	0.21
	3. 他人を助けることを、上手にやれますか。	0.60	0.01	0.08
	7. こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。	0.55	0.31	-0.15
	11. 相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。	0.42	0.23	0.11
	18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。	0.33	0.27	0.09
	1. 他人と話していて、あまり会話が途切れない方ですか。	0.28	-0.07	0.23
トラブルの処理	17. まわりの人たちが自分とは違った考えをもっているもうまくやっていますか。	-0.18	0.76	0.14
	4. 相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。	0.11	0.63	-0.07
	6. まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。	0.18	0.53	0.20
	16. 何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。	-0.11	0.50	0.26
コミュニケーション能力	8. 気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。	0.28	0.47	-0.08
	15. 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。	-0.17	0.23	0.74
	5. 知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。	0.05	0.04	0.73
	10. 他人が話しているところに、気軽に参加できますか。	0.43	-0.09	0.58
		I	II	III
		I	0.62	0.35
		II	1.00	0.36
		III	0.35	1.00

次に社会的スキル尺度の平均値、SD、 α 係数の結果を表7に示した。

	平均	SD	α
問題解決力	2.81	0.72	0.86
トラブルの処理	2.97	0.71	0.78
コミュニケーション能力	2.57	0.95	0.79

各因子の信頼性の検討として α 係数を算出したところ、第1因子「問題解決力因子」は高い値が得られ、第2因子「トラブルの処理」、第3因子「コミュニケーション能力」はほぼ得られた。

(3) 自尊感情尺度の分析

自尊感情尺度10項目に対して、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。因子分析の結果、10項目2因子抽出された。第1因子は「私は自分に見どころがあると思う」「私は自分が少なくとも他人と同じくらい価値のある人間だと思う」などの逆転項目でない項目ばかりが集まったため、「ポジティブ因子」と命名した。第2因子は「自分を失敗者だと思いがちである」「私は自分が役立たずだと感じる」など、逆転項目が集まったため、「ネガティブ因子」と命名した。自尊感情尺度の因子パターンを表8に示した。

因子	質問項目	因子		
		1	2	
ポジティブ	3. 私は自分には見どころがあると思う。	0.80	-0.03	
	7. 私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う。	0.78	-0.18	
	1. 私は自分に満足している。	0.77	-0.14	
	10. 私は自分に対して、前向きな態度をとっている。	0.67	-0.07	
	4. 私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる。	0.54	0.06	
ネガティブ	9. ★自分を失敗者だと思いがちである。	-0.07	0.80	
	6. ★私は自分が役立たずだと感じる。	0.28	0.58	
	8. ★もう少し自分を尊敬できたらと思う。	-0.32	0.57	
	2. ★私は自分がだめな人間だと思う。	0.42	0.46	
	5. ★私には得意に思うことがない。	0.26	0.45	
		I	II	
		I	1.00	0.53
		II	0.53	1.00

次に、自尊感情尺度の平均値、SD、 α 係数の結果を表9に示した。

	平均	SD	α
ポジティブ	2.37	0.66	0.80
ネガティブ	2.16	0.66	0.77

各因子の信頼性の検討として α 係数を算出したところ、第1因子「ポジティブ因子」は高い値が得られ、第2因子「ネガティブ因子」はほぼ得られた。

2. 友人関係不安尺度と社会的スキル尺度の相関関係

友人関係不安尺度と社会的スキル尺度の各因子の関係を検討するために、友人関係尺度の2因子と社会的スキル尺度の3因子の相関係数を算出し、表10に示した。

表10.友人関係と社会的スキルの相関係数

	友人関係不安尺度			社会的スキル尺度	
	友人からの評価不安因子	友人との距離不安因子	問題解決力因子	トラブルの処理因子	コミュニケーション能力因子
友人からの評価不安因子	—	0.84	-0.32***	-0.38	-0.23*
友人との距離不安因子		—	-0.33***	-0.41	-0.27**
問題解決力因子			—	0.61	0.45
トラブルの処理因子				—	0.48
コミュニケーション能力因子					—

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

「友人からの評価不安因子」と「問題解決力因子」では $r=-0.32$ ($p<.001$)、「友人からの評価不安因子」と「トラブルの処理因子」では $r=-0.38$ 、「友人からの評価不安因子」と「コミュニケーション能力因子」では $r=-0.23$ ($p<.05$)と、「友人からの評価不安因子」は「社会的スキル尺度」3因子全てと弱い負の相関がみられた。「友人との距離不安因子」と「問題解決力因子」では $r=-0.33$ ($p<.001$)と弱い負の相関がみられ、「友人との距離不安因子」と「トラブルの処理能力因子」では $r=-0.41$ と中程度の負の相関がみられ、「友人との距離不安因子」と「コミュニケーション能力因子」では $r=-0.27$ ($p<.01$)と弱い負の相関がみられた。

3. 友人関係不安尺度と自尊感情尺度の相関関係

友人関係不安尺度と自尊感情尺度の各因子の関係を検討するために、友人関係不安尺度の2因子と自尊感情尺度の2因子の相関係数を算出し、表11に示した。

表11.友人関係不安と自尊感情間の相関係数

	友人関係不安尺度		自尊感情尺度	
	友人からの評価不安因子	友人との距離不安因子	ポジティブ	ネガティブ
友人からの評価不安因子	—	0.84	-0.24*	-0.47
友人との距離不安因子		—	-0.32*	-0.46
ポジティブ			—	0.53
ネガティブ				—

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

「友人からの評価不安因子」と「ポジティブ因子」では $r=-0.24$ ($p<.05$)と弱い負の相関がみられ、「友人からの評価不安因子」と「ネガティブ因子」では $r=-0.47$ と中程度の負の相関がみられた。「友人との距離不安因子」と「ポジティブ因子」では $r=-0.32$ ($p<.05$)と弱い負の相関がみられ、「友人との距離不安因子」と「ネガティブ因子」では $r=-0.46$ と中程度の負の相関がみられた。

V. 考察

本研究では、友人関係不安に焦点を当て、社会的スキル、自尊感情との関連を検討した。

1. 友人関係不安尺度の分析結果の考察

本研究において伊藤ら(2010)の作成した友人関係不安尺度の「友人関係維持不安」、「自分の内面を知られる不安」の 2 因子 25 項目全てを友人関係不安尺度として使用した。先行研究にならい、因子分析を行ったところ、先行研究とは異なる項目によって成り立つ 2 因子が抽出された。第 1 因子は「友人からの評価不安因子」であり第 2 因子は「友人との距離不安因子」である。第 1 因子「友人からの評価不安因子」18 項目と第 2 因子「友人との距離不安因子」7 項目について α 係数を算出したところ第 1 因子は 0.97、第 2 因子は 0.87 と高い値が得られた。このことから、十分な内的整合性のある尺度であることが明らかとなった。先行研究では自分の内面を知られることだけを不安に思っている女子青年が多かったが、梶山の女子学生の友人関係不安の傾向として、自分の内面だけでなく相手の内面も気にして友人と接している人が多いという傾向により、因子構造が変化したと考えられる。

第 1 因子の「友人からの評価不安因子」の平均値を見ると 1.52 であり中間点である 2 を下回る結果となっている。第 1 因子の因子負荷量の高い項目をみると、「友人と対立するのが不安である」、「友人に自分勝手と思われているか不安である」、「友人に嫌われてしまうのではないかと不安である」などの友人から自分がどのように思われているか不安である項目から成り立っており、本研究の調査対象者は、友人から自分に対して評価を受けることに対する不安が低いと考えた。

第 2 因子の「友人との距離不安因子」の平均値を見ると 1.53 であり、中間点である 2 を下回っている。第 2 因子の因子負荷量の高い項目をみると、「ありのままの自分を出すことが不安である」、「自分の内面に踏み込まれすぎると不安である」、「友人の内面にどこまで踏み込んでいいか分からず不安である」など、友人との距離を測りかねて不安になる項目から成り立っているが、本研究の調査対象者は友人との距離を測りかねて不安になることは少ないと考えられる。以上のことから、本研究の調査対象者は友人関係不安自体が低い傾向にあると考えた。

2. 社会的スキル尺度

菊池(1998)の社会的スキルを測定する尺度 18 項目すべての項目を用いることができた。因子分析の結果「問題解決力因子」「トラブルの処理因子」「コミュニケーション能力因子」

の3因子が抽出された。しかし、「問題解決力因子」の中で「仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか」「他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか」の2項目は因子負荷量が十分でなく削除された。菊池(1993)の因子分析結果では、「問題解決力因子」に「相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。」が含まれる。「トラブルの処理因子」には「怖さや恐ろしさを感じた時に、それをうまく処理できますか。」「相手から非難された時にも、それをうまく片づけることができますか。」「あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。」「仕事の目標をたてるのにあまり困難を感じないほうですか。」が含まれる。「コミュニケーション能力因子」には「気まずいことがあった相手と上手に和解できますか。」「自分の感情や気持ちを素直に表現できますか。」が含まれ、本調査とは異なる因子分析結果であった。菊池(1993)の調査では男子大学生を対象としており、本調査では女子大学生を対象としたことが理由として考えられる。各因子の信頼性の検討として、 α 係数を算出したところ、「問題解決力因子」は $\alpha = 0.86$ と高い値が得られた。このことから、十分信頼性のある尺度であることが分かった。「トラブルの処理因子」は $\alpha = 0.78$ 、「コミュニケーション能力因子」は $\alpha = 0.79$ と、「トラブルの処理因子」「コミュニケーション能力因子」においては、十分ではないが信頼性のある値が算出された。「トラブルの処理因子」「コミュニケーション能力因子」においては、項目が少なく、十分でなかったため、 α 係数の低下につながったのではないかと考えた。

各因子の平均値を見ると、「問題解決力因子」は 2.81、「トラブルの処理因子」は 2.97、「コミュニケーション能力因子」は 2.57であった。3因子とも中間点の3を下回る結果となっている。その中でも、「コミュニケーション能力因子」が3因子の中で最も大きく下回る結果となった。「コミュニケーション能力因子」の因子負荷量の高い項目をみると、「初対面の人に、自己紹介が上手にできますか」や「知らない人とでも、すぐに会話が始められますか」などの項目で構成されている。このことから、本研究の調査対象者は人見知りをしてしまう人が多くいるのではないかと考えられる。社会的スキル因子は対人関係を円滑に運ぶための技能であり、相手がこちらを無視しないでこちらの働きかけに応じてくれる「肯定的反応」を貰うことができ、反対に相手が応じてくれなかったり、あからさまに拒否したりする「否定的反応」を避けることのできるようなスキルを指している。(菊池, 1998)3因子すべてが中間点の3を下回ることから、本研究の調査対象者は、相手に否定的反応をさせてしまうような恐れがあると考えられる。これは調査対象者が人見知りをしてしまうことと関係していると考えられる。

3. 友人関係不安尺度と社会的スキル尺度の関連の考察

友人関係不安尺度の各因子と社会的スキル尺度の各因子との相関を見るため、相関係数を算出した。その結果、友人関係不安尺度の第1因子「友人からの評価不安因子」では、社会的スキル尺度の第1因子「問題解決力因子」とでは弱い負の相関がみられた。このことから、友人から自分がどのように評価されているか不安になる人は、臨機応変に仕事や

相手からふられた問題に対して解決する力が低いと感じていることがわかった。社会的スキル尺度の第 2 因子「トラブルの処理因子」とでは弱い負の相関がみられ、友人から自分がどのように評価されているか不安になる人は、何かトラブルがあったときにうまく処理したり、かわしたりすることが出来る能力が低いと感じていることがわかった。社会的スキル尺度の第 3 因子「コミュニケーション因子」とでは弱い負の相関がみられ、友人から自分がどのように評価されているか不安になる人は、初対面の人や知らない人に話しかけたり、他人の話に参加したりするコミュニケーション能力を低いと感じていることがわかった。

友人関係不安尺度の第 2 因子「友人との距離不安因子」では、社会的スキルの第 1 因子「問題解決力因子」では弱い負の相関がみられ、友人とどのように距離をとったらいいか測りかねてそれによって不安を感じる人は、臨機応変に仕事や相手からふられた問題に対して解決する力が低いと感じていることがわかった。社会的スキルの第 2 因子「トラブルの処理因子」では中程度の負の相関がみられ、友人とどのように距離をとったらいいか測りかねてそれによって不安を感じる人は、何かトラブルがあったときにうまく処理したり、かわしたりすることが出来る能力が低いと感じていることがわかった。社会的スキルの第 3 因子「コミュニケーション因子」では弱い負の相関がみられ、友人とどのように距離をとったらいいか測りかねてそれによって不安を感じる人は初対面の人や知らない人に話しかけたり、他人の話に参加したりするコミュニケーション能力を低いと感じていることがわかった。友人関係不安尺度の各因子と社会的スキル尺度の各因子の間には弱い、あるいは中程度の相関がみられた。よって仮説 2 の「社会的スキルの低い者は高い者に比べて友人関係不安が高い」が支持された。

4. 自尊感情尺度の分析結果の考察

本研究において桜井(2000)が日本語訳した Rosenberg の自尊感情尺度 10 項目を全て使用した。先行研究にならい因子分析を行ったところ、内田ら(2010)の先行研究では単因子であったが、本研究では第 1 因子「ポジティブ因子」5 項目と第 2 因子「ネガティブ因子」5 項目が抽出された。第 1 因子「ポジティブ因子」5 項目と第 2 因子「ネガティブ因子」5 項目についての α 係数を算出したところ第 1 因子は 0.8、第 2 因子は 0.77 と高い値が得られた。このことから、十分な内的整合性のある尺度であることが明らかとなった。

第 1 因子の「ポジティブ因子」の平均値をみると、2.37 であり、中間点である 2.5 を下回っている。第 1 因子の因子負荷量の高い項目をみると、「私は自分には見どころがあると思う」、「私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値のある人間だと思う」、「私は自分に満足している」などポジティブな自尊感情項目から成り立っている。

第 2 因子の「ネガティブ因子」の平均値をみると、2.16 であり、中間点である 2.5 を下回っている。第 2 因子の因子負荷量の高い項目をみると、「自分を失敗者だと思いがちである」、「私は自分が役立たずだと感じる」など、逆転項目から成り立っている。本研究では 2

因子が抽出されたが、先行研究は単因子構造であり、今回の研究でも 2 因子間で逆転項目とそうでない項目という以外に異なった特徴を見つけることが出来なかった。以上のことから、本研究の調査対象者は自尊感情自体が低い傾向にあると考えられる。

5. 友人関係不安尺度と自尊感情尺度の関連の考察

友人関係不安尺度と自尊感情尺度の各因子との相関関係をみるため、相関係数を算出した。その結果、友人関係不安尺度の第 1 因子「友人からの評価不安因子」では、自尊感情尺度の第 1 因子「ポジティブ因子」と弱い相関がみられ、第 2 因子「ネガティブ因子」とでは中程度の相関がみられた。このことから友人から自分に対して評価を受けることを不安に思う女子大学生は自尊感情が低いことが分かった。友人関係不安尺度の第 2 因子「友人との距離不安因子」では自尊感情尺度の第 1 因子「ポジティブ因子」と弱い相関がみられ、第 2 因子「ネガティブ因子」とは中程度の相関がみられた。このことから、友人との距離を測りかねることによって不安を感じる女子大学生は自尊感情が低いことが分かった。

6. 今後の課題

今回の問題点として、調査をする際に年齢を聞いていなかった。現代の青年期の女子大学生に焦点を当てていたが、現在の大学生の中では青年期ではない人も含まれている可能性がある。次回からは年齢を聞き、焦点を当てている対象年齢を確認すべきである。

本調査では、男子に比べ女子のほうが友人関係に対する不安を感じるという先行研究の結果から、女子大学生のみを対象としている。女子大学生のみならず、男子大学生も対象にすることで、性差が現れ、比較することができる。また、先行研究を裏付ける結果が得られるのかについても検討することができるため、男子大学生も調査対象に入れるべきであった。以上のことを今後の課題として検討していこうと考えている。

IV. 引用文献

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究,47,180-190.
- 原田朋枝・島田修 2002 社会スキルの自己評価と対人関係不安との関連,12,75-81
- 伊藤拓・増田和美 2010 女子青年の友人関係不安尺度の作成と女子青年の友人関係不安に関連する心理・社会的要因の検討 安田女子大学心理教育相談研究,Vol9,27-39.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 向社会的行動の心理とスキル 187-204
- 菊池章夫 1989 社会的出会いの心理学 川島書店
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつき合い方の発達の变化 教育心理学研究,44,55-65.

桜井茂夫 2000 ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 65,68.

内田知宏・上埜高志 2010 Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 -Mimura&Griffiths
訳の日本語訳を用いて-,58,2,257-266